

ねりまの文化財

東京文化財ウィーク参加事業

「石神井城フォーラム一九九九」を開催します

— 石神井城と自然をふるさとねりまの誇りに —

昨年に引き続き二回目の開催となる

「石神井城フォーラム一九九九」。東京文化財ウィーク期間中の十一月一三日(午前一〇時三〇分〜午後三時)、石神井公園内の石神井城跡とその周辺を会場に、今年は広がりのある展開を目指します。ふだん立ち入ることができない石神井城跡推定主郭内部の発掘現場を公開するほか、野外講演会、石神井周辺の出土品展などさまざまな催しを行います。ご家族連れやお友達とお出かけになり、郷土の歴史や自然に親しんでみませんか。

【内容】

◆講演会

石神井地域に因んだテーマの講演会を

石神井城跡で行います。

◆石神井城跡発掘現場の公開

主郭と推定される部分の堀の規模、構築・廃棄時期を把握するための学術調査が、公募で選ばれた区民の皆さんの参加のもと十一月二日〜一二日に行われます。その発掘現場を公開し、出土品など発掘成果を発表します。

◆あおぞら遺跡博物館

池淵遺跡や扇山遺跡など石神井地域にある遺跡で出土した遺物を展示し、解説します。実際に手にとって触ることもできます。会場は池淵史跡公園です。

◆郷土資料室V企画展示『豊島氏に関する史跡あんない』

する史跡あんない』

石神井城主、豊島氏に関係する史跡などをパネルで紹介します。

◆史跡探訪会

区民ボランティアの案内で、石神井城跡とその周辺の史跡を訪ねます。

◆歴史クイズウォークラリー

郷土の歴史に関するクイズを解きながら、各会場や文化財を巡るウォークラリーを行います。

※ 詳しくは、十一月一日発行のねりま区報をご覧ください。

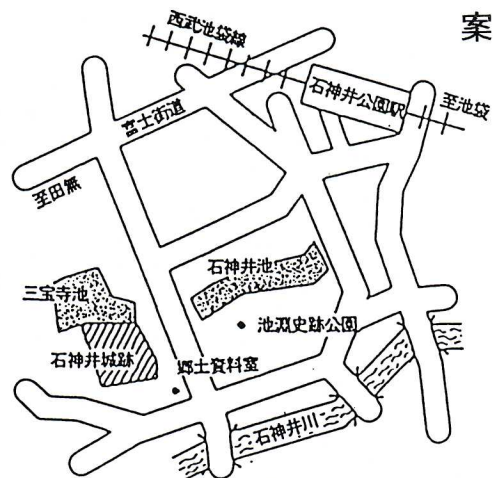
◆問合せ

練馬区教育委員会生涯学習課 文化財係

練馬区教育委員会
生涯学習課
(文化財係)
☎ 3 9 9 3 - 1 1 1 1
〒 1 7 6 - 8 5 0 1
練馬区豊玉北6-12-1



昨年公開した堀の発掘現場



石神井公園駅から徒歩7分

区内遺跡から出土した縄文土器の文様

縄文時代は約一万年続いたといわれる時代で、土器などに独特の文様や形がみられます。「縄文」という名前の由来は、初めに発見された土器に縄目の文様がついていたことによりですが、縄文土器は縄目だけでなくいろいろな文様を組み合わせて飾りたてられています。

古い時期の縄文土器は無文のものもありますが、口の部分に棒を刺突して文様をつけたり、爪で器面をなぞったものや摘んだものもあります。また、棒に縄を巻き付けて転がしたり(撚糸文)、棒(沈線文)、赤貝のようなギザギザのある貝(条線文)、櫛などの工具(条線文)で線をつけるなどが地文としてつかわれています。縄文土器はこのような地文の上に粘土をはりつけ、渦巻き状のモチーフにしたり、粘土紐に刻みをいれ、三角形をつくったり、把手をつけるなどの装飾をします。縄文時代のなかで、特にさまざまな飾りがつけられていたのが中期の土器です。

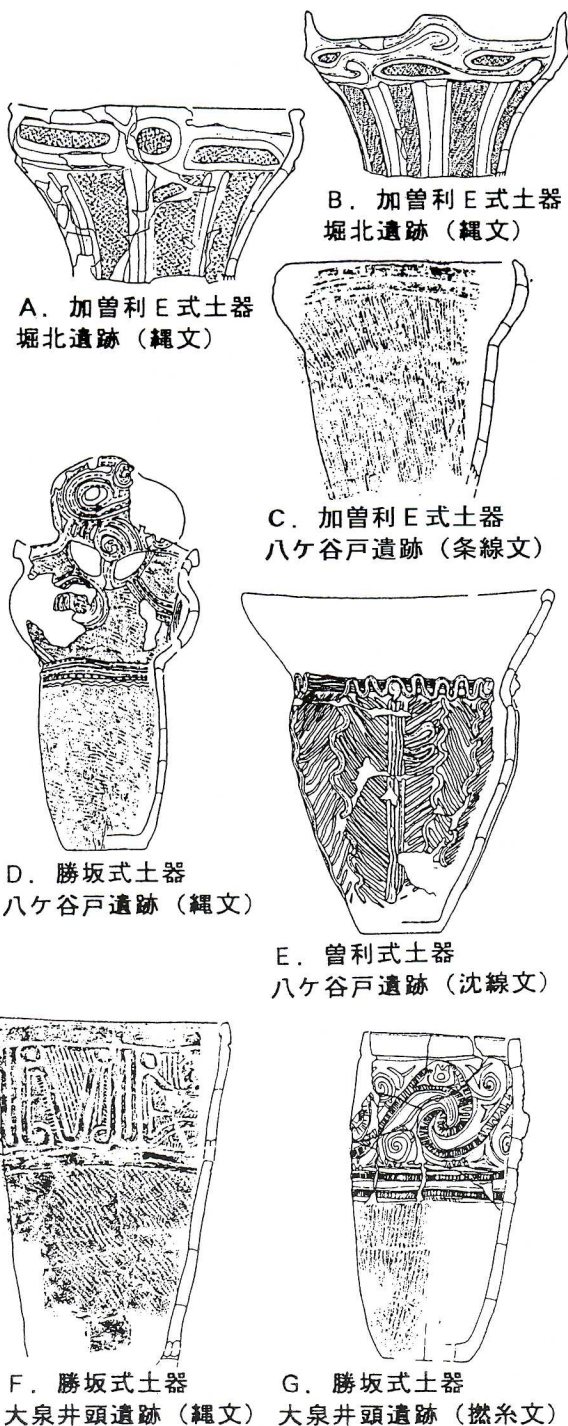
練馬区の位置は武蔵野台地の北西部で、荒川水系に注ぐ小河川(石神井川・白子川など)の流域に遺跡が分布します。このため、土器の特徴は埼玉県や千葉県に近いのがみられます。逆に多摩川流域

右岸の遺跡は山梨県など、中部山地にみられる特徴があります。

今回は、区内遺跡で出土した土器の特徴をみてみましょう。

区内では縄文中期の遺跡が最も多く、縄文中期の遺跡からは他の時期に比べて多量の土器が出土します。竪穴住居跡などが多数みつかっている代表的な三つの遺跡、石神井川流域の堀北遺跡(富士見台四一三四他)、白子川流域の八ヶ谷戸遺跡(大泉二一七他)と大泉井頭遺跡(東大泉七一一三八他)についてご紹介します。

堀北遺跡 縄文中期の竪穴住居跡が一六



軒程みつかっています。A・Bは中期後葉約四五〇〇年前の加曾利 E 式土器です。加曾利 E 式というのは、千葉県千葉市加曾利貝塚の E 地点から出土した土器が、標識となつてつけられました。つまり、土器の時間的な位置づけと地域的な分布範囲を踏まえてつけられた「型式」を表しています。この場合、まとまって発見され、型式として認識されたのが加曾利貝塚出土の土器ということになります。

口の部分がふくらみをもって広がり、頸の部分がすぼまって底部にいたる特徴的な形をしています。地文は縄文や撚糸文が多く、口の部分に粘土紐を貼りつけ、渦巻きや楕円形などのモチーフをつけ、胴部に棒で線を縦につけて装飾しています。

加曾利 E 式土器は南関東を中心に東北南部や中部地方にまで分布が広がっています。

八ヶ谷戸遺跡 縄文中期の竪穴住居跡が三〇軒みつかっています。Cも加曾利 E 式土器で、櫛状の工具で条線文をつけ、口の部分には棒状の工具で沈線文をつけています。Eは曾利式土器で、住居跡から出土しました。曾利式土器は長野県富士見町曾利遺跡が標識となっています。

Eは加曾利 E 式土器と胎土(土器をつくる粘土)に違いがみられないことから曾利式土器をつくっていた「ヒト」がこの地域にやって来て土器を製作したかもしれません。Dは勝坂式土器で、先の加曾利 E 式土器よりひとつ古い型式です。分布範囲は南関東が中心で、中部地方や東

北地方ではより地方色の強い別の型式があります。神奈川県相模原市勝坂遺跡が標識遺跡で、加曾利E式土器と比べると、いろいろな文様がつけられています。粘土紐にへら状工具で刻みをいれたり、把手をつけたりして多様です。特に、Dの大形の土器は把手に東北地方の土器の影響がみられます。

大泉井頭遺跡 縄文中期の堅穴住居跡が一〇軒、後期が一軒確認されました。F・Gは勝坂式土器です。ともに円筒形で、Gは撚糸文の地文に粘土紐で渦巻き状のモチーフの上に刻み目がつけられています。Fは縄文の地文の上に竹を半分縦割りにした工具で三角形のモチーフなどを描いて独特の文様を構成しています。勝坂式土器はこのように多様なモチーフをもち、また大きな把手の土器が目立ちます。刻み目のある粘土紐が大きくって蛇のようなモチーフが表現されたり、眼鏡のような把手をもつものなど意匠に富んだ土器の特徴をもちます。



大形把手付土器 (D)

木下家文書が寄贈されました！

平成十一年一月二五日、木下坦氏より文書の寄贈を受けました。木下家は江戸時代、川越街道の下練馬宿(北町)の名主と本陣を兼ねた家柄で、作左衛門という名前を代々名乗りました。今回寄贈された資料は寛永十九年(一六四二)から明治期までの合計六三三点です。金乗院、御屋敷下掃除(しもうち)に関わるものなど内容は多岐にわたりますが、今回は本陣に関わる資料を紹介いたします。

本陣は江戸時代、参勤交代の大名や公家などが休息・宿泊した施設です。下練馬宿の本陣であった木下家の屋敷は、上段の間、玄関、長屋門を備えた立派なものであったと思われます。地元の古老の話によると、現在、西友練馬北町店のある所に本陣はあったそうです。

文書の冒頭の部分に、木下家が紋付きの袴(かまも)を拝領していることに対して「袴は江戸時代、武士の正装でした。しかし、木下家は百姓身分でありながら袴を許されており、大名を迎えるときに着用したものとされます。大名といっても川越街道を通行するのは川越藩だけで、木下家代々の当主はもっぱら川越藩主を饗応しました。」

三行目以降は文書の本論となっています。

す。これまで木下家は独力で本陣を維持してきましたが、このたびの破損は著しく、しかも近年農作物の不作・凶作が続いて、自力で本陣を修繕するのは難しい、本陣の修復金として二〇〇両を拝借したという内容が記されています。

一般的に本陣を勤める家は、江戸時代後期になると経営が苦しくなる例が多く見られます。本陣には大名から休息・宿泊に対して定額の賃金が支払われます。しかし、江戸時代後期は物価の高騰に比べて賃金の値上げ幅が小さく、本陣の経営は圧迫されました。木下家もおそらく



同じ傾向であったと思われる、写真の文書は作成年不詳ながら、江戸時代後期の本陣の苦しい経営の様子を物語っているものと思われれます。

木下家文書の中で本陣に関する資料はこの一点だけです。しかし、区内で江戸時代に唯一の宿場であった下練馬宿の文書資料はあまり残っていないため、貴重な郷土資料と言えます。なお、木下家文書は今後区民の皆様が活用できるように整理を行ってゆく予定です。末筆ながら、御寄贈下さいました木下坦氏に御礼申し上げます。

乍恐以書付奉願上候
御本陣木下作左衛門奉申上候、私儀年来御本陣役被仰付殊ニ御紋付御上下拝領仕誠ニ冥加至極難有仕合奉存候、然ル処家居是迄取繕修復等致置候処、此度者殊之外大破仕手広之家作二而中々難ニ及、自力ニ御本陣役難相動体ニ罷成、難儀至極仕候二付無是非御願奉申上候、成文出精仕右体之儀者奉申上間敷存罷在候得共近年不作凶年打続候、上之儀二而漸取繕罷在候仕合故手広之修復可仕手段無御座当惑至極仕候間、何卒御慈悲を以諸家作普請修復金として金式百両拝借被仰付被下置候様奉願上候、右願之通御聞濟被成下候ハ、年来之御本陣相動難有仕合奉存候以上

文化財講座のご案内

「文化財の見方・楽しみ方」

歴史や自然などの文化財を私たちがどのように利用し、何をすることが出来るのかを体験学習します。さらに、その経験を活かして、文化財を次の世代へ伝えることの大切さを考えます。

講座は二日制で行います。一日目は、文化財係学芸員による講義「文化財を楽しむための知識」と体験学習の説明などを行う予定です。二日目は区役所からバスで鎌倉市まで行き、四コースに分かれて散策します。講義で学んだことを体験するため、皆さんには事前に見学コースの文化財などについて、調べていただきます。

◆とき・ところ

第一日目 講義

二月二日(木)午後二時～四時

練馬区役所会議室

第二日目 バス見学

二月九日(木)

午前七時三〇分～午後五時

神奈川県鎌倉市

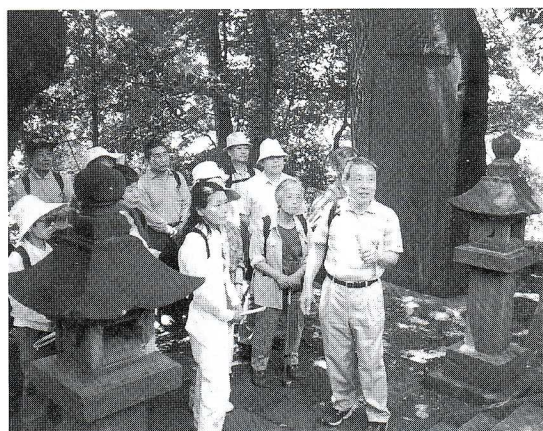
◆費用

一五〇円～八六〇円(保険料など)

見学コースにより異なります)

◆定員 四九名(抽選)

※ 詳しくは、一月一日発行のねりま区報をご覧ください。



『文化財の見方・楽しみ方』に参加して

朝比奈 I. C. を通過して A 班は最初にバスを下車、滑川にかかる華の橋近く、車道から一米足らず高くなっている歩道は幅も一米位、都築さんを先頭に一列縦隊で杉本寺へ、九時四十分だった。

鯉の泳ぐ川面を見下し乍ら下流へ約五分、向い側に急な石段が立ち上った感じで木立の間に見えて来た。百段余りか、白い幟が数十本はためいていた。

坂東札所第一番鎌倉最古の杉本寺は天平六年(七三四)聖武帝時代光明皇后の御願により、大臣藤原房前と僧行基に命じ建立され行基自ら刻んだ十一面観音が安置され、後に僧円仁、僧源心の刻んだ観音と合わせて、本尊三体となった由、

縁起に記されていた。

天平時代といえは仏教伝来から百数十年後、すでに朝廷の力がはるか関東にまで及んでいた事を感じた。

朱塗りの仁王様、茅ぶきの本堂の三体の本尊はうすぐらい中央に時代が止ったままの御姿で静かにほほえみ、慈悲のまなざしで見つめて下さった思いがした。

境内右手には二百余りの五輪塔と六地藏が夏の陽ざしを遮る杉木立のもと、霊場の雰囲気漂わせ、本堂からは学僧の読経が流れた。左手の急なわき道を登ると杉本城跡へとつづく、三浦一族の城跡で山あいを川に沿って鎌倉本陣へと切り立った山道だった。石段を下る途中、弁天堂があり湧水の池には鯉が泳ぎ、奥の「やぐら」は半分水の中に沈んでいた。

華の橋を渡ったのは十一時。庚申塔、道しるべを、表から裏側から頭をかき上げ乍ら眺め消えかけている文字を指先で追いつけ、しばし足をとめた。竹の寺として有名な報国寺へ、拝観料を払って本堂の左手から竹の庭へ。見上げる孟宗竹の葉先がキラキラと輝き、清々しく、ひんやりした小路を進む。裏山に大きな「やぐら」が池の向うに我々を迎えた。開基は足利尊氏の祖父の家時。三洞の「やぐら」は肌寒さをも感じさせる重々しい風格があり、五輪塔は今にも池を渡ってこちらへと歩みよるのではないかと感じた。

釈迦堂口切り通しに到着したのは正午。途中、田楽ずしの道という説明板を見つけ、釈迦堂があった当時は田楽師達が住んでいたことがわかった。坂道を登りきった所に通行止めの標識。ポツカリ開いた空間は壮大な岩の門で数百年の歴史がぎゅっしりとのしかかって来る思いがした。吹き抜ける風に山道の暑さを忘れた。三十分休けい。切り通しの向う側に思いを馳せた。通行止がうらめしい。

大御堂橋まで滑川沿いを下流へ、報国寺の竹庭に因んだわけではないだろうが、竹の生垣の家が立ち並び緑が印象に残る小路をゆっくりと歩く。橋を渡ったらバス通りだった。三時間余りの散策は一体何であったのか。「やぐら」、五輪塔、切り通し、歴史と文化財に思いをはせた幻想的な時間。現実とがあまりにも近くに交錯している不思議な町鎌倉。バス通りの陽ざしはきびしく、又しても孟宗竹の葉ずれの風や切り通しを抜けるさわやかな風がどこからか体を通り抜けて思い出された。集合場所へは予定より早く到着。皆さん満足そうな笑顔であった。

昨年二月、はじめて参加させていたただいた時は、只々三上先生の後について山道を必死の思いで歩いた事を思い出しました。二回目という今回は少し気持ちゆとりがあり、何事も経験という有難さを感じた講座でした。

〔名越 翠〕